

日印文化交流に関する国際会議

「India and Japan: Roads to the Modern」(ニューデリー) に参加して

小日向 英俊

1. はじめに

2014年9月12日(金)～13日(土)に開催された、「インドと日本：現代への道 (India and Japan: Roads to the Modern)」との題目の国際会議に出席した。日印関係における国際政治、経済、軍事といった研究の「王道」ではなく、現在まで無視されることが多かった工芸、テキスタイル、音楽、美術、写真などの各分野⁽¹⁾における日印関係を考察することを目的としたものであった。ニューデリー市内のインド国際センター (India International Centre) において、2日間で計5つの分野別セッション、計10件の研究発表と討論が行われた。討論の時間を十分にとった会議の設計のために、発表者以外の会議参加者も交えて、相互に実りある議論を行えた。発表概要については後に述べる。

日本やイギリスから参加した研究者は、当センターの宿泊施設に宿泊する形を取ったため、国際学会の大型大会とは異なり、大学時代の合宿のような雰囲気の中で、研究面と人的交流の両面において濃密な空間を楽しむことになり、実に有意義な時となった。発表の合間に口にするインド式スナックや食事、主催者のホスピタリティを感じるものばかりであった。会議への招待を、こころより感謝する。

主催は、デリー(インド)の中国研究所 (Institute of Chinese Studies: ICS) 東アジアプログラム部門⁽²⁾であった。当研究所は、インドで最も早くから中国研究を行った機関として、現在も中国と東アジアに関する研究を担う重要拠点の一つである。研究所ウェブ⁽³⁾によれば、その設立はこの分野の研究者らにより1969年に開始された自主的「水曜セミナー」に端を発するとのことである。1990年に現在の名称による研究所組織となり、インド外務省、フォード財団(米国)、国際交流基金(日本)などからの資金を導入しながら、中国・東アジアをフィールドとするインド人研究者を育成しているとのことだ。沿革を読み解くと、この研究所には元から中国を政治、経済、軍事の面だけでなく、文化の面からも研究しようとの意図があったようである。その意味では本国際会議も、文化の側面に着目するというDNAを受け継いだものといえるだろう。

会議を組織し中心的な存在として重要な立場にあったのは、同研究所名誉研究員であり、

(1) 本会議のキーパーソンであるブリジュ・タンカ博士 (Dr. Brij Tankha) の開会挨拶、招待発表者へのメッセージ。

(2) 公式ウェブサイトは、<http://www.icsin.org>

(3) Institute of Chinese Studies 2014.

デリー大学社会学部東アジア学科名誉教授であるブリジュ・タンカ博士（Dr. Brij Tankha）であった。博士の専門は日本近・現代史であり、特に北一輝、幸徳秋水、岡倉天心、南方熊楠らの思想研究、日本と中国および朝鮮半島、および日印関係についても関心を持っている。近年は、日本の人間文化研究機構現代インド地域研究推進事業⁽⁴⁾と関わりながら、日本に長期・短期滞在している。日印の音楽上の交流を当面の研究課題と捉える筆者の視点からも、博士の日本人・文化理解の深さと、本会議プロジェクトの構想に敬意を表したい。また、本会議を資金面から支えた国際交流基金（インド事務所）にも、感謝を表したい。会議の内容は現在編集集中の成果物として、近々に出版予定と伝えられている。拙稿は、これに先立つ筆者個人の見解による抄録である。

2. 会議概要

会議全体は、「セッション1. インドと日本：現代への道（India and Japan: Roads to the Modern）」、「セッション2. 工芸と現代世界（Crafts and the Modern World）」、「セッション3. 建築と写真におけるトランスナショナルの流れ（Transnational Flows in Architecture and Photography）」、「セッション4. 現代性を織る（Weaving Modernity）」、および「セッション5. アジアを聴く（Listening Asia）」を2日間に配置して構成された。近現代におけるインドと日本における文化交流の多様な側面が報告されたこの会議は、日印の文化交流の様々な事例について、分野を超えた研究者が共有できた点に大きな意味があると考えられる。

ここで、研究発表を一覧しておく。

セッション1. インドと日本：現代への道

「インド、日本と変化するアジア（India, Japan and a Changing Asia）」

発表者：ブリジュ・タンカ（デリー大学）

「極東オリエント：世界における近代主義の源泉にあるインドと日本
（Extreme Orient: Japan and India at the Roots of Global Modernism）」

発表者：ルパート・アロースミス（ユニヴァーシティ・カレッジ・
ロンドン[UCL]）

(4) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構が、2010年2月24日に策定した「現代インド地域研究推進事業基本計画」により、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属「現代インド研究センター」（KINDAS）、東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター「現代インド研究部門」（TINDAS）、広島大学「現代インド研究センター」（HINDAS）、人間文化研究機構国立民族学博物館「現代インド研究拠点」（MINDAS）、東京外国語大学「現代インド研究センター」（FINDAS）、龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター「現代インド研究センター」（RINDAS）の6拠点和全国の研究者が連携して南アジア研究を進めるプロジェクトのこと。（人間文化研究機構2010）

セッション2. 工芸と現代世界

「グルチャラン・スィングとトランスナショナルな民芸運動
(Gurcharan Singh and the Transnational Mingei Movement)」

発表者：ユウコ・キクチ（ロンドン芸術大学）

「現代性を創造する人の交流：新しい陶芸言語

(Confluences Creating Modernity: A New Ceramic Language)」

発表者：クリスティーヌ・マイケル（陶芸家・陶芸研究者、デリー）

セッション3. 建築と写真におけるトランスナショナルの流れ

「トランスナショナルなモダニズムの工芸：インドと日本におけるアントニン／ノエミ・レイモンド（Crafting a Transnational Modernism: Antonin and Noemi Raymond in India and Japan)」

発表者ヘレナ・チャプコヴァー（早稲田大学）

「ニザームとジャポニズム：ハイデラーバード藩王国⁽⁵⁾、チョウマハラ宮殿
コレクションにある日本の手彩色写真（Nizam and Japonism: Japanese Painted
Photographs in the Chowmahalla Palace Collection, Hyderabad)」

発表者：プラモード・クマール K. G.（Eka Archiving Services社、デリー）

セッション4. 現代を織る

「工芸の保存：印日の関係とアジアの現代的テキスタイル美学の確立（Craft
Conservations:India-Japan and the Making of a Modern Asian Textile Aesthetic)」

発表者：アーラーティ・カウル（ネールー記念博物館・図書館、デリー）

「ジャパン・サリー（The Japan Sari)」

発表者：杉本星子（京都文教大学）

セッション5. アジアを聴く

「日本における南アジア音楽の受容（Reception of South Asian Music in
Japan)」

発表者：小日向英俊（東京音楽大学）

「音楽との出会い：小泉文夫とアジア音楽の発見（Musical Encounters:
Koizumi Fumio and the Discovery of Asian Music)」(発表後にヴィーナー演奏)

発表者：的場裕子（日本女子体育大学）

(5) ニザーム藩王国、アサーフ・ジャーヒー朝などとも言うが、発表者の表現を踏襲する。

本報告では全ての研究発表の詳細を伝えられないが、これらの発表題目を見るだけでも、日印の文化における交流が多様な分野に及んでいることが分かる。

3. 様々なトピック

筆者の発表については後に述べるが、ここではまず多様なトピックの中でも特筆すべきものについて報告しておく。

ブリジュ・タンカは基調発表として、明治期以降の政治も含めた自らの日本研究に触れ、近年では単なる外交史・経済史としての日印関係ではなく、人的交流を基礎にした文化上の交流史の研究に着目すべきことを強調した。筆者の研究⁽⁶⁾によれば、中国の彼方にあり実際には見ることのなかった「天竺」としてのインドの音楽ではなく、インド人が歌い奏でる姿に日本人が直接接することが明治期以降に進み、現在のある程度の量を伴った受容や交流につながる歴史がある。諸文化における交流史には大いなる興味を持つ次第であり、かつこの分野の研究は未だ発展途上だと感じる。

アロースミスは、西洋社会における近代性（Modernity）を巡る言説に触れ、西洋近代がインドや日本を含むオリエントに波及し模倣されたとする見方に異を唱えた。実際の西洋の近代化には、多くのアジア文化の影響があったと述べ、西欧近現代への道程には、特に19世紀末における日本→インド→欧州への東洋からの影響が色濃く存在したと指摘した。具体例として、ロンドンにおけるモダニスト・アートの最初の事例と見られる彫刻家ヤコブ・エプステイン（Jacob Epstein: 1880-1959）⁽⁷⁾やエリック・ギル（Eric Gill: 1882-1940）⁽⁸⁾らの初期作品群にインドの寺院建築美術からの影響を指摘した。

工芸セッションで発表したキクチは、柳宗悦（1889-1961）⁽⁹⁾、濱田庄司（1894-1978）⁽¹⁰⁾、バーナード・リーチ（1887-1979）⁽¹¹⁾らが推進した日本の民藝運動が米国、およびオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、カナダを含むイギリス連邦諸地域のローカルな工芸運動に大きな影響を与えたこと、その要因の一つに各国に訪問を重ねた宗悦らとの直接的接触があったことを指摘した。リーチが日本から帰英後にセント・アイヴスで作った日本風の登窯のあるリーチ工房からの作品や彼の著作物は、その中でも特に大きな影響を与えたことを指摘した。

インドの「陶芸工房の父」とされ、日本に窯業を学びに来たサルダール・グルチャラン・

(6) Kobinata 2009 および Kobinata 2011.

(7) Horlock 1997.

(8) Stuart-Smith 2014.

(9) 日本民藝協会 2015.

(10) 日本民藝館 2015a.

(11) 日本民藝館 2015b.

スィング（1898-1995）⁽¹²⁾は、リーチを通じて民藝に通じて行くこと。日本の民藝運動における陶芸分野が、トランスナショナルに受容されたことを指摘した。その後スィングは、1928年に全インド美術・工芸協会（All India Fine Arts and Crafts Society）の設立メンバーとなり、その後も1952年設立の全インドハンディクラフト評議会（All India Handicrafts Board (AIHB)）の活動に参加する。キクチは、スィングのリーチとの関わりを詳細に追いつつ、インド国内における「インド民藝運動」の推進に日本の民藝が影響を与える様を、具体的作品群を示しながらケース・スタディーとして報告した。門外漢の筆者からすると、日本の工芸分野が20世紀初頭から戦後を越えた時代までインドに影響を与えていることを知り、目を開かされた。キクチによれば、こうした印日の交流については、未だに研究は少ないとのことであるため、さらなる研究の進展が進むことを望むばかりである。

建築と写真におけるセッションからは、写真について報告する。発表者プラモード・クマールは、写真の専門家として博物館や資料館におけるアーカイヴに関する技術提供を行うとともに、インドの写真史を研究しているという。インドの現ハイデラーバード市地域を治めたハイデラーバード藩王国の宮殿には、19世紀後期に制作された日本の手彩色写真のコレクションがあるという。恐らくハイデラーバード藩王国6世ニザームであった、ナワブ・ミール・マハブブ・アリー・カーンへの寄贈品だと推定されているという。発表者クマールはそのコレクションを写真とともに紹介し、インド人たちが英国を含めた西洋文化への関心を高めていた当時の時代背景にあって、インド人が日本の視覚芸術に関心を持った最初期の事例ではないかとの報告であった。幕末・明治初期に盛んに制作された彩色写真については、日本国内での関心も高まっているようである⁽¹³⁾。

藤原によれば⁽¹⁴⁾、日本の彩色写真の色づけは幕末・明治の錦絵作者がその技術を写真に応用しており、当時はまだ白黒でしか表現できなかったものを疑似カラー写真に仕立てたものである。また、これらを写真帖（アルバム）に仕立てたものは、日本に来た西洋人により日本土産として持ち帰られた。ハイデラーバードに現存するこれらの彩色写真が西洋人経由でもたらされたものか、または明治初期から写真術が盛んだった横浜に居住したインド商人からもたらされたものなのかについては、記憶の限り発表では触れられなかったが、大いに興味のある点である。ただ、横浜に商会を構えたインド商人には英領インドの西側の地域（現パーキスターン内）出身者やパールスィー⁽¹⁵⁾がいたこと、1893（明治26）年のボンベイ航路開設、横浜正金銀行ボンベイ出張所の開設、1904（明治37）年の日印通商航海条約調印など、当時の日本とインドは経済でも大きなつながりがあったこと⁽¹⁶⁾を考慮すれば、インド商人により運ばれた可能性は高いのではないかと、筆者は考え

(12) Ceramics Today 2014および、Delhi Blue Pottery Trust 2015.

(13) 藤原 2005:34.

(14) 上掲書:36.

(15) 「パールスィー」は西インドに居住するゾロアスター教徒のこと。

(16) 小口および田中 2000:76-91.

る。

音楽における印日交流の側面については、的場と筆者が担当した。1950年代にインドに音楽留学を行い、日本にインドをはじめとしてアジア、アフリカその他諸地域の音楽文化を紹介した音楽学者小泉文夫(1927-1983)の活動の詳細⁽¹⁷⁾を的場が紹介した。的場自身が小泉の下で音楽学を修め、かつ師と同じ領域を専門とする研究者になったことも考え合わせれば、筆者が後に述べる異文化音楽受容を担う公的部門(大学)における音楽受容の実例を体現した発表でもあった。小泉の音楽研究アプローチは、当初の日本伝統音楽の研究から始まった。その後、世界の諸地域の基層文化に存在する音楽を含む様々なジャンルに耳を傾け、現地調査を通じて接することで、人間の音楽とは何か、日本の音楽とは何かを問う研究を行った。現在の日本における、世界の異文化音楽の受容の進展を大きく支えた人物である。的場はこれらを、写真や音声により伝えた。

4. 筆者のトピック

筆者は、日本における異文化音楽受容の歴史を南アジア音楽の受容に着目して概観した。奈良・平安時代における仏教音楽受容を除けば、インド音楽の受容史は明治初期より始まり、戦後の小泉ら研究者による「公的部門における受容」を経て、「私的部門における受容」まで大きく進んでいることを指摘した。また現在では異文化音楽同士の交流は一对一の形式ではなく、さまざまな関係が複合的かつ同時的に進行し、様々な異文化音楽の要素が混合していくところの「ネットワーク型受容」が進行中であるとも主張した。これを基本モデルとして考慮しながら、受容されるインド音楽のジャンルの経時的広がり、現地のネイティブ音楽家と日本人のインド音楽愛好者やインド音楽実践家が直接つながり、人的交流が緊密になってきたことも触れた。具体的事例として、インド音楽の即興的要素を取り入れた新しい音楽の創造例を、ポップスに近い分野といわれる西洋クラシック音楽の延長線上にある現代音楽ジャンルの例で紹介した。最後に、音楽における日印文化交流は、通史的に見ても日本側の「輸入超過」となっていることを指摘し、その音楽交流は「非対称性」となっていると結論した。セッション2からセッション5の諸分野では、インドに向かう文化のインバウンドの流れに関する発表が多かったが、これは恐らく実際の交流実態がそのみだったのではなく、発表者の総数と選択に偏りがあったためであると筆者は考えている⁽¹⁸⁾。ただ、音楽分野におけるインドへのインバウンド方向の流れについては、当セッションのチェアを努めたインド人音学研究者スパー・チャウドリ博士の賛同も得た。筆者の観察では、インドの音楽文化においては、ハードウェアはインバンドで受け入れるが、

(17) 小泉文夫記念資料室 2014.

(18) 建築家伊東忠太(1867-1954)のインド建築の現地調査や研究と応用や、染織工芸家芹沢銈介(1895-1984)のインドの染め物蒐集など、他にも事例は多数あるだろう。

音楽そのものについてはなかなか外から受け入れない傾向があると考えている。ただ歴史的な観点からは、中世インド世界におけるペルシャ音楽受容の事例も存在する。これに照らせば、現在進行中の事態はただ単に、日本の影響が「まだ見えない」だけで、200～300年程度の長期においては、何らかの影響を与える可能性も否定できない。その場合はおそらく、日本の中にすでに広く受容された西洋音楽の要素ではなく⁽¹⁹⁾、民藝運動がインドに影響を与えたような日本独自の音楽観や音楽世界がインド人に受け入れられる場合に限るのではとも考える。

今回は文学、思想についてのセッションが組まれなかったことが悔やまれるが、文化の諸側面に着目して日印関係の研究を深めることが、今後もさらに進展することを望む。

(19) すでに、インドの映画音楽や芸術音楽の中にもその影響は現れている。

参考文献

Ceramics Today.

- 2014 “Artists of the Week: Gurucharan and Mansimran Singh”.
<http://www.ceramicstoday.com/potw/singh.htm> (アクセス日: 2014年12月16日)

Delhi Blue Pottery Trust.

- 2015 "About us". http://www.delhibluepotterytrust.com/about_us.php
(アクセス日: 2015年1月29日)

藤原, 秀之.

2005. 「早稲田大学図書館所蔵 明治期彩色写真帖」. 『早稲田大学図書館紀要』. Vol. 52, p. 34-78.

Horlock, Mary.

- 1997 "Jacob Epstein". TATE, Art and artists.
<http://www.tate.org.uk/art/artists/sir-jacob-epstein-1061> (アクセス日、2014年12月16日)

Institute of Chinese Studies.

- 2014 “History: From a seminar group to a research institution”.
<http://www.icsin.org> (アクセス日: 2014年12月15日)

Kobinata, Hidetoshi.

- 2009 「The Reception of Asian Musics in Modern Japan --- Who are learning or performing Indian music? ---」. 『国立音楽大学研究紀要』. Vol. 41, p. 93-103.

_____, _____.
_____.

- 2011 「South Asian Musics in Recordings : Old and New Publications in Japan」.
『国立音楽大学研究紀要』. Vol. 46, p. 127-136.

小泉文夫記念資料室.

- 2014 「小泉文夫年譜」.
<http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/chronological.html> (アクセス日: 2014年12月20日)

人間文化研究機構.

- 2010 「現代インド地域研究推進事業基本計画」.
http://www.nihu.jp/sougou/areastudies/pdf/india_kk.pdf (アクセス日: 2014年12月16日)

日本民藝館.

- 2015a 「生誕120年記念濱田庄司展 2014年6月17日(火)～8月31日(日)」.
<http://www.mingeikan.or.jp/events/special/201406.html> (アクセス日: 2015年1月29日)

_____.

- 2015b 「バーナード・リーチ作品」.
<http://www.mingeikan.or.jp/collection/author01.html> (アクセス日: 2015年1月29日)

日本民藝協会.

2015 「民藝とは何か」.

<http://www.nihon-mingeikyokai.jp/about/> (アクセス日: 2015年1月29日)

小口, 悦子および田中, 玲子.

2000 『儀太郎のシルクロード: 明治・大正期の絹織物輸出商・澤田儀太郎の生涯』.
廣済堂大阪事業部.

Stuart-Smith, Stephen.

2014 “Eric Gill”. TATE, Art and artists.

<http://www.tate.org.uk/art/artists/eric-gill-1168> (アクセス日: 2014年12月16日)

以上